

Title	李笠翁と日本の戯作者
Sub Title	Li Yu and Japan's gesaku writers
Author	岡, 晴夫(Oka, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.73, (1997. 12) ,p.574- 586
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	安藤伸介, 岩崎春雄両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00730001-0586

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

李笠翁と日本の戯作者

岡 晴夫

李漁（笠翁、一六一一—一六八〇）という文人・作家の実像を把握するうえで、欠くことのできない大切なポイント
は、彼がいわゆる〈戯作者〉であるということであろう。従ってその作品に対する見方や評価は、ごく一般通常の文芸
としてではなく、〈戯作〉という特異な視点から成されなければならないと私は思っている。

〈戯作〉とは何か、これをごく簡略に規定するならば、わが江戸期に生まれた一種の「娯楽文芸・遊びの文芸」であ
ると言えるであろう。笠翁の戯曲および小説は、その内容や性格から見ても「戯作」と同一視し得るものなのである。¹

笠翁の友人尤侗（展成）は、彼の文芸を評して「狡獪の伎倆を用って游戲の神道を作す」と謂った（『閑情偶寄』序
文）。まさしく笠翁文芸の本質本領にふれて核心を衝いた、非常に重要な発言であるとして注目したいと思う。すなわ
ち、つねに「狡獪の伎倆」を發揮し駆使しようとする笠翁なる戯作者は、実にしたたかな曲者なのである。そのすがた
を容易には捉えにくい、複雑に入り組み屈折した精神構造の持ち主であるといつてよい。それが何に由来するかといえ
ば、結局は〈卑下慢〉という気分・氣質に依るであろう。みずからの才能や学識に対しては人一倍強烈な自信と自負心

をもちながら、一方においては、ぬぐい去りたい自卑の心・自嘲心がある。心の奥深いところで（戯作者）であることに、負い目や引け目・不面目を感じ背負いこんでいるのである。

つまり、まずは科挙に挫折し、文人としては完全にアウトサイダーとして生きて、きわめて通俗卑俗な小説戯曲を書いたものであり、しかもそれは好色と滑稽わらいを特徴とする、いわば位取りの点で一段と低いものであった。とくに建前原則の強固な中国においては蔑まれ、尚雅の精神を基底とする正統派文人の伝統的感覚からは、当然排斥されるべきものだったのである。

こうした小説戯曲で有名になつた彼は、ほかにもさまざまな特技や才能があつたから、全国各地の名士富豪の招きに応じて、彼らの間を食客として渡り歩いた。みずからこれを「托鉢」と称して、たかり生活をしたのである。その折には、若い妻たちに芝居を仕込んで、これをひき連れて行つて自作の戯曲を演じさせ、パトロンのご機嫌をうかがうといった行いをし、いわば文人くずれの「高等幫間」として世過ぎしたのだった。また、こうした「托鉢」だけでは生活していけなかつたから、出版販売業をも営んだ。目端の利く商売人として商才にもたけていたと思われる。つまり笠翁の手に成る小説戯曲は、読者観衆に媚びた卑俗なものであつたし、それに彼の生業や生き方も、「高等幫間」としてたかり生活をする、そして同時に商売人でもあるという、文人としては真当ならざるものであつた。

そのような生き方が、明末清初という時代には大幅に許容され容認されたのは事実だとしても、それがやはり文人として普通・尋常・真当なるものではないという自覚なり自意識が、彼自身の心中に潜在していたのは当然であろうと思われる。彼がしばしばみずからを指して「賤者」と規定しているのは、その最も端的なあらわれであろう。

笠翁がみずから払拭しきれぬ負い目や不面目を背負っているについては、その証左となる事柄を他に何点か指摘でき

るのではないかと思う。ここからも彼のコンプレックスを察知することができるであろう。

まず第一に、笠翁には歴史を論じた『論古』（『笠翁別集』巻一）があるが、そのなかでかの東方朔が『史記・滑稽列伝』では「滑稽」として軽んぜられていることに対して、大層ムキになって怒り憤り、作者の司馬遷を「腐史」と罵っているのである。

人謂へらく、武帝の名臣はまさに首に董仲舒・汲黯を推すべしと。予謂へらく、東方朔立朝するに、風采二臣の下に在らず。史氏察せず、乃ち滑稽を以て之を軽んじ、優孟諸人と併齒す、冤なる哉。……朔は又一代の通儒にて其の學術は董仲舒の下に在らざること知るべし矣。……吾、朔は腐史と何の讐ありて、遂に其の凌り賤しめに遭ふこと此の若きなるかを知らざる也。豈に千古不決の疑案に非ずや。（『論東方朔諫内董偃置酒宣室』）

これは言うまでもなく、「滑稽」として凌り賤しまれていた東方朔に、笠翁が自分自身のすがたを完全に重ね合わせて憤っているのである。笠翁の屈折したコンプレックスを、ここに明らかに見て取ることができると思う。

笠翁は、そもそも激昂したり悲憤慷慨したりはしないタイプの人間である。「不肖硯田に黽口し、原憤もとを発して書を著はすに非ず」（『曲部誓詞』）とみずからも言うように、平素は表面上あくまでも穏やかで、ひたすら低姿勢を示していると言ってよい。つまり、舌鋒の鋭さとか辛辣さといったものをいっさい持たず、決して攻撃的ではなく、ましてやヒステリックではない。可能な限り柔軟な軽いフットワークをもって姑息に行こうとする、それがむしろ笠翁について言える大きな特徴なのである。ところが、ほとんど他には例を見ることなく東方朔の扱いについてのみここで猛然と憤

を発し激昂しているのであるから、その心理的背景には当然注目すべきであろう。なお、東方朔よりもずっと先輩にあたる「滑稽の雄」に淳于髡がいる。笠翁自身がこの淳于髡にまさる滑稽であることが呉偉業によって詩に詠まれ、それが尤展成によって一層強調されたことを、併せてぜひ想起したいと思う。⁽²⁾

第二に指摘したいのは、当時説書家として赫赫たる名声を馳せた柳敬亭（一五八七—約一六七〇）に関わることである。彼についていえば、いわゆる「芸人」でこれほどの著名人は他にいないと思われる人物であったから、明末清初期の非常に大勢の詩人文人たちが、さまざまに取りあげて言及しているのである。⁽³⁾ 例えば、呉偉業・黄宗羲・周容・沈龍翔等は彼のために伝記を書き、錢謙益・龔鼎孳・余懷・杜濬・張岱・冒襄・毛奇齡・閻爾梅その他、詩文に讃辞を寄せた文士諸大家は枚挙に暇がない。袁于令『双鶯伝』・孔尚任『桃花扇』等のように、彼を劇中に扱った戯曲作品もある。「凡そ明末清初の著名な詩人で彼に言及しないものは少い、といって過言ではない」（福本雅一氏『明末清初』）ほどなのである。

ところが、李笠翁には一言も彼について触れたものがない。口舌の面白さで聴衆を釣ろうとするのが説書家であるが、同様にストーリーの面白さとその組み立て方に心をくだいた笠翁が、そうした話芸の名人と謳われた柳敬亭に全く興味を示さなかったはずはなく、それはむしろ非常に考えにくいと言わなければならない。

すなわち、この場合笠翁の彼に対する心情心理には、かなり複雑な屈折したものがあつたのではないかと思われる。なぜならば、笠翁自身が「芸人」に等しいと見なされていた文人であつた。そう言われても仕方がないし、事実「人以外優目之」（『曲海総目提要』）と言われたのである。だから芸人まがい、芸人ふぜいの生業に身を置いているということ、いわば柳敬亭と同じ「芸人」仲間の同業者であるという負い目を深く意識していたはずである。が、一方において

は、文人知識人としての強固なプライド・自負心があつた。そのプライドや自負心が敢えて完全に柳敬亭を無視させることになつたのではなからうか。

他のごく一般通常の文人知識人たちには、当然ながら笠翁のような負い目や引け目はなかつたから、何のわだかまりや抵抗もなく柳敬亭にあい対し、これを筆にすることができた。ところが、心中に卑下と倨傲が同居し錯綜して、得てして奇妙なこだわりやわだかまりの気分をもつのが、いわゆる「戯作者」の精神構造である。笠翁の場合もまたそれゆゑに、柳敬亭に対しては殊さらにこれを無視して言及することを避けたのではなからうかと思われるのである。

李笠翁と他の一般文人との間には、このように心の奥底に深い負い目やこだわりを持つていかどうかという点で、明らかに異なり一線が画されていると私は考えている。そのちがいは例えば、文集に収録され残されている尺牘によつてみても、ある程度推測されるのではなからうか。

笠翁は当時の名だたる文人たちとたいへん幅広く交際していた。『笠翁一家言』にはそうした交遊を示す尺牘文が百篇以上も収録されていて、その一斑をかいま見ることが出来る。彼は自分がいかに多くの文人名士たちと親しく交際していたか、彼らに与えた尺牘の内容を細大もらさず伝え残そうとしたのである。逆に、文人名士たちの側にも笠翁に与えた書簡があつたはずであるが、彼らは自己の文集にはそれらをいっさい残していない。例えば笠翁と特に深い交遊関係にあつた尤侗（展成）の『西堂雜俎』、あるいは杜濬（于皇）の『夔雅堂遺集』には、笠翁宛ての尺牘を一通も見出すことができないのである。それはどうしてであらうか。

笠翁にしてみれば、自分がいかに時の多くの名士たちと交際していたかを誇示しなかつたのであり、それは彼にとつても晴れがましいことであつた。一方、時の名士たちにしてみれば、いわば「芸人」ふぜいの笠翁とつき合つたとして

も、それは決して別に名譽でも何でもなかったし、後世に残そうなどとは思ひもしなかったのである。それどころかむしろ隠蔽しておきたいほどのことだったかも知れない。だからこそ笠翁あての尺牘があったとしても、それらは意識的にみずからの文集に収録することをせずに省いたのであろう。そのように理解するよりほかないのではなからうか。

いずれにせよ笠翁の心中には、拭い去りたい負い目がありコンプレックスがあった。文士としての位取りの高さという点で、自分が一段と低い者だという自覚があつて、強くこれにこだわっていたのではなからうかと推察されるわけである。

次に注目し指摘したいのは、笠翁がしばしば好んで口にする「嗜痴（偏好）」ということばであり、これはそのまま笠翁の文芸の性格を示すキーワードとなっているようにも思われる。例えば次のように言う。

……凡そ余の生平の著作、皆此に萃あつむ。嗜痴の癖有る者、此を買かひて以て去らば、笠翁を偕にして帰るが如くなる。
ん。（「閑情偶寄」器玩部）

噫、吾老いたり矣、用ふるに足らざる也。請ふ、崖略を以て之を簡篇に付し、嗜痴の者の采擇に供さんことを。
（同、居室部）

これらが彼一流の戲謔の口調であるのはいうまでもないが、みずからの作品をもって風変りなおもむきもの、下手物あじのものだと謂っているのである。さらにまた、このようにもいう。

噫、李子一生、著書千卷、苟くも妒婦の口に非ざるも、嗜むに以て痴と爲さざる無し。（「與陳學山少宰」）

これは笠翁自身の文筆著書の本質を、かなり率直に表白していると解してよからう。自分が一生のうちにもした「著書千卷」は、真大な味わいのものではない風変わりなおもむきのもののだと殊さらに言ってみせ、そこに傲慢に居直っているのである。こういう風変りな面白いものが、いったい自分以外の誰に書けるか、これらは天下一品であるというしたかな自信をウラに秘めてもいるのである。事実たしかにその通りなのであって、『閑情偶寄』もまた然り、戯曲も小説も捻りに捻った趣向によるまことに面白い風味のものであり、そこにこの作者特有の個性、他に比類ない独自性があるのであるから、そこをこそ評価しなければならぬであらう。笠翁はまた得意気に次のようにもいう。

漁自ら甘泉に抵り、大將軍の揖客と爲りて、捫虱の迂談を肆にし、嗜痴の偏聽を聳たしむ。（「寄謝劉耀薇大中丞」）

恐らくこれは笠翁の弁舌に長けた「高等幫閑」ぶりを十分窺わすに足る言い草であるが、それをまたヌケヌケ得得として述べ立てているところがいかにも笠翁らしいといえる。彼の滑稽の才のうちで一つの特徴は、自分自身を貶しめてみせる、コケにしてみせるというところがある。これは誰も傷けない最も危険のない安全な笑いであるが、このコケにしてみせることができるというところが、実は注意を要するところなのである。これはつまり強い自信と自負心のウラ返しなのであって、オモテかと思うとウラがひそんでいる、そのあたりの底意というものをせひとも読みとらなければならぬ。

この「嗜痴」ということばについてみるならば、笠翁にのみ限らず明末清初期の文人の著作中に少なからずその用例を見出すことができる。一風変わったものの個性的なものなかに独自の価値を見出し喜ぶという風潮が、この時期にはあったのである。たとえば馮夢龍や尤展成・張潮等々の文章のなかにも散見するが、しかしそれらはいずれの場合も自己の作品について「風変りなもの」といつているのではない。そこが実は注目すべきところであつて、笠翁は右に示した数例を見てもわかるとおり、自己の著述・言説に向けてこの語を用い、それらが「嗜痴者」を喜ばす風変りなものだといつているのである。そしてたしかに「嗜痴者」好みとも言いうる一風異なつた独自の味わいを帯びているのが、ほかならぬ李笠翁の作品なのである。

譬えていふならば、それは決して表通りにある然るべき構えの立派なレストラン、そこで出される正式真当の料理ではない。むしろ路地裏にある赤提灯風の一杯呑み屋、そこで出される下手物風味の珍妙なる味わいの小料理である。両者は、格調の高さという点では大きな開きがある。いわゆるメジャーとマイナーの差であるといえよう。ところが笠翁は、往々にしてその赤提灯風の店をもつともらしい構えのレストランのごとくに装い、然るべき料理のようにも見せかけてさし出すというようなことをする。眉唾な胡散くさい表現をしてみせるのがいわば戯作者流のレトリックなのであるから、そうした「狡獪伎倆」による煙幕にまかれてしまつては、まんまとその手の中に落ちることになってしまう。

ところで〈戯作〉なるものは、とくに思想といふようなものをもたず、とり立てて何も主張しない、従つていわば気分本位のムダな文学、無用の文学、なのだといふことになる。マイナーの文芸たるゆえんである。もちろん「無用の用」なるものがあつて、それが戯作のよきではあるものの、ともあれ「有用の文学」ではないといふところから、その作者（戯作者）はややもすれば心中にある種の後ろめたさや負い目引け目を抱くことになりがちである。創作するにあ

たつては懸命に努力し苦勞しながらも、そのすえにできた作品が読者に單なる慰みを提供するにすぎないところから、とくに学識に富み醒めた眼をもつ戯作者たちには、空しきにも似た感情を抱かせるようである。それは、自分が無用の文学にたずさわる無用者だという意識でもある。

例えば、戯作界のボスの存在である平賀源内は、みずからの著作が徒勞であることを自嘲してそこに居直り、「已に賢るのむだ書」(『放屁論後編追加』)と嘯き、また最晩年には、「功ならず 名ばかり遂て 年暮ぬ」という句を詠んでいる。ここには、みずからふり返つてみて実のない虚なる人生であつたという、言い知れぬ空しさ苦々しさを伴つた感懷詠嘆がこめられているのである。

初めから戯作者たらんことを目指して勵んだ大立者が、山東京伝であつた。彼には従つていわゆる鬱屈や屈折がないはずであるが、自作黄表紙のなかで「戯作者ばかり羨ましからぬものはあらじ。人には糸瓜(へちま)の皮のように思はるるよ。……実学者に出あひては、一言も流しにいとずるとぶ鼠のごとく、尻尾をまいて逃げつべし」(『作者胎内十月図』)と言つている。自分が戯作者で虚名を貪つたということ、また筆禍に遭つたことを、後に国学者となつた若き友人の黒沢翁磨宛て書簡のなかでしきりに後悔しており、戯作は渡世のためにやむなくやつてゐることを切々と訴え、和学に志すのが第一だと勧めてもいるのである。そして晩年には国学の研究考証に執着してその方を主とし、戯作の方は従にしている。つまり戯作から学問研究の実学へと転向しているわけで、その温和で誠実な人柄ゆえの心情の変化が注目される。結局戯作者としての負い目や無用者意識から脱げることができなかつたといえよう。

さらに、戯作界の巨匠・曲亭馬琴について見るならば、彼は「稗官小説は鄙事也」(『作者部類』)と論断し、「いはでもしるき架空の言、畢竟、遊戯三昧にて、毫も世に裨益なし」(『八犬伝』「九輯」卷三十三簡端付録作者総自評)と開

き直った。と同時に、「大約小説は、勸懲を宗とせしものならざれば、弄ぶに足らず」（詰金聖嘆）とし、また、「勸懲を手づくよ示し候が拙者癖に御座候」（曲亭書簡集）と言って、みずから勸善懲惡にこだわり続けたのだ。馬琴が一貫してこれほどまでに勸懲にこだわったのは、性格的にきまじめだった彼は、せめてこれにすがりつくよりほかなかったからであり、それは結局、戯作者としての無用者意識、その屈折したコンプレックスの然らしめるところであったと考えざるを得ないように思われる。

また、学才に恵まれながらも仕官運動に失敗し、市井の浪人儒者として生きたのが寺門静軒だった。彼は漢文戯作中第一級の力作といわれる『江戸繁昌記』の冒頭で、「嗟、斯の無用の人にして、斯の無用の事を録す」と述べた。そして、静軒が「無用之人」を標榜しながら実は有用の世界に未練を残していたのに対して、掛け値なしに「無用之人」と自己規定して野にかくれたのが成島柳北である。彼は、「真に天地間無用の人と爲れり、故に世間有用の事を爲すを好まず」と言い、「吾は固より無用の人なり、何の暇か能く有用の事を爲さん」（『柳橋新誌』）と述べて、強く開き直っているのである。

これら日本の戯作者たちの自嘲・卑下・負い目・不面目といった感情あるいは「無用者意識」については、右にあげた数例を見てもわかるとおり、総じてたいへん単純ストレートに吐露され表現されていると言えるであろう。これに対して李笠翁の場合には、日本の戯作者たちほど単純明瞭ではなく、隠微にしかつしたたかな表現をとることが多い⁽⁴⁾。

例えば「過子陵釣台」と題する詞がある。後漢の光武帝に招かれたが応ぜず、隠者で通したという高潔の士・嚴子陵、彼が釣りをしたと伝えられる台を通ったときの感慨を詠じたものである⁽⁵⁾。「嚴陵を過れば 釣台は咫尺なるも登り

難し」の初二句からしてすでに、自分にひきくらべて子陵が到底手の届かないかけ離れた存在であることを暗示する。まずは己れのすがた容貌の醜さをのべ、「とも同に綸竿を執り 共に蓑笠を披るも 君の名は何ぞ重く我は何ぞ軽き」と言い、「相い去ること遠し 君は厚禄を辞し 我は虚名を釣りぬ」と嘆ずる。後関では自卑自嘲の念を一段と強め、たかり生活をし手ぶらで帰るのを愁えるような自分であるから、天文官の誰が客星が現れたなどと帝に奏上したりしようかと（子陵が帝に聘せられて共に偃臥したとき帝の腹に足をのせた故事「客星犯帝座」を踏まえて）自嘲する。そして、他日またこの地を過るときには、羞ずかしさに目を見開くこともできまい、と言って一篇を結んでいる。——この詞に見られる徹底した自嘲自卑の口吻と、逆にそれを表出せしめる開き直りの情の強靱さに、ぜひとも注目したいとおもう。

もう一つ取りあげたいのは、「偶興」と題する五言古詩である。「仙を学びては呂祖を学び 佛を学びては弥勒を学ぶ 呂祖は游戲の仙 弥勒は歡喜の佛」と詠いおこして、いかにも喜劇作家らしく「我は佛に非ず仙に非ざるも 饒かに有す二公の癖」と言い、続けて「嘗て歡喜の心を以て 幻くらまし爲せり游戲の筆 書を著はす三十年なるも 世に于て損益する無し」と詠じている。これは、ちょうど先に示した曲亭馬琴の発言「畢境、游戲三昧にて、毫も世に裨益なし」と、結局同一趣旨をのべていることになる。注目すべきところであろう。

またさらに笠翁は、「但願はくは世間の人 齊しく極楽の国に登らんことを 縦たとひ使長久なり難しとも 亦且く朝夕娛しまん 一刻苦悩を離るれば 吾が責は亦塞がると云はん」ともいう。それらには、自己満足とサービスピ精神に生きた「戯作者」の、自負と孤独、自己主張と自嘲の心の双方が、同時に混在し錯綜しているのである。

これらの詩詞に見られる李笠翁のこころは、「功ならず 名ばかり遂て 年暮ぬ」と詠じた、かの平賀源内の心境と

も、一脈通じ合うものが認められると思う。

すなわち、いま一度くり返すならば、「君名何重我何軽」といい、また「我釣虚名」という、さらに「著書三十年于世無損益」とのべる笠翁の感懐、これこそ日本の戯作者たちのあいだに通用する「無用者意識」にもつながるものである。それは、戯作者として生きたおれの人生をふり返りみて、実のない虚名をのみ馳せたという、侘びしい空しい念いでもある。そういう念いや感懐があつたからこそ、笠翁にはみずからの全著述を集めて『一家言』としてまとめ、後世に名を残したいという願望も、またひと倍強固だったに相違ないと思われる。

そして笠翁は、その異才によつてたしかに後世に名を残すほどの著名人となつたのであつたが、彼のような戯作者タイプの文人は、中国文学史上およそ他に類を見ず、ひとり突出し際立っているのである。それはいわば中国文学という「一大レストラン」のなかにあつて提供される、まさに比類ない独特の風味、珍妙なる味わいの一品なのだということができるであらう。

注

(1) 〈戯作〉の特性としては以下の四点を指摘し得るであらう。——(一)いわゆる正統派・本格派のメジャーの文芸とはあい対置する、非正統派のマイナーの文芸であること。(二)作者みずからが慰み戯れに筆をとり、遊戯精神が横溢していること。(三)読者に慰みを提供するという姿勢から、俗に居直り娯楽性をこそ強調するものであること。(四)そのためにさまざまなる趣向をこらして創作する、趣向重視の文芸であること。

(2) 尤展成は言う——「武林李子笠翁、能爲唐人小説、尤善金元戯曲。吳梅村祭酒嘗贈詩云『江湖笑傲誇齊贅、雲雨荒唐憶楚娥』、蓋実録也」〔『名詞選勝』序〕。詳しくは拙稿「李漁評価に関する考察」〔『芸文研究』第五十四号〕第五章参照。

(3) 『說書芸人柳敬亭』(上海文艺出版社)、『揚州曲芸史話』(人民文学出版社)、『揚州曲芸史話』(中国曲芸出版社) 他参照。

(4) 拙稿「戯作者氣質——李笠翁とわが国と——」(『新日本文学大系』第八十卷・月報33、岩波書店) 参照。

(5) 原詞：「過巖陵、釣台咫尺難登。為舟師、計程遙筭、不容先輩留行。仰高山、形容自愧、俯流水、面目堪憎。同執綸竿、共披蓑笠、君名何重我何輕。不自量、將見高比、纔識敬先生。相去遠、君辞厚祿、我釣虛名。再批評、一生友道、高卑已隔千層。君全交未攀袞冕、我累友不恕簪纓。終日抽風、只愁戴月、司天誰奏客為星。羨爾足加帝腹、太史受虛驚。知他日、再過此地、有目羞瞠。」

(6) 原詩：「学仙学呂祖、学佛学弥勒。呂祖游戲仙、弥勒歡喜佛。神仙貴洒落、胡為尚拘執。佛度苦惱人、豈可自懷鬱。我非佛非仙、饒有二公癖。嘗以歡喜心、幻為游戲筆。著書三十年、于世無損益。但願世間人、齊登極樂國。縱使難久長、亦且娛朝夕。一刻難苦惱、吾責亦云塞。還期同心人、種萱勿種檠。」

本稿は、一九九五年三月二十七日、北京大學古文獻研究所および中文系の要請に應じて講演したときの筆録(『中國典籍與文化』同年第三期掲載)に基づいて整理したものである。